可能性)、犯罪も予防することができる（統制可能性）と期待するからである。つまり、予期可能性と統制可能性を確認することで、自分に対する犯罪不安の低減を図っている。しかし、犯罪者が犯罪に至る心理は、複数の要因が絡み合っていて一言で説明できるものではない。また、犯罪は一部の異常な人による行為ではないため、様々な立場の人々が現場で犯罪という「悪」に挑み続けているのが現状である。

犯罪心理学の現場は、捜査機関、司法機関、矯正機関に大別できる。捜査機関は科学捜査研究所の研究員（ポリグラフ検査、プロファイリング)、司法機関は家庭裁判所調査官、矯正機関は刑務所、少年院、少年鑑別所の法務技官に代表される。この他にも、児童相談所や保護観察所などでも心理職の人々が活躍している。

犯罪の現場では、常に加害者と被害者という人間が存在する。そして、加害者には刑罰、被害者には心の支援が必要である。そのため、犯罪に関連した心理職には、①専門職として自らの仕事の結果に対して責任を持つこと、②研究活動を通じて最新で高水準の職業的能力を維持すること、③自らが道徳的・法的規準を遵守すること、④人権への配慮と秘密保持を厳守すること、⑤他の専門職の能力や義務を尊重し、独善的な判断に陥らないこと、⑥偏見や先入観にとらわれず、真実を解明する真摯な態度を常に持ち続けること、そして、⑦何よりも人間を愛する心を持つことが求められる。

犯罪の増加傾向が見られる今日、犯罪という「悪」に挑む若い力が必要とされている。

第７話　パンドラの箱が開いた！

――ギリシア神話が語る悪――

後　藤　　淳（人間学研究室）

農民詩人と呼称されるヘシオドスの二つの作品『神統記』『仕事と日々』の中に描かれたプロメテウス・パンドラ神話を通観することにより、彼の世界観に占める人間の位置と、彼が説いた愚直な生の意味について考える。

ヘシオドスの二つの作品においてなぜパンドラ神話が取り上げられているかについて考えることは、神話内挿話での彼女の役割を見抜くことになり、さらには「希望（エルピス)」という言葉に彼が込めた人間の生、報われることの少ない労苦の塊である人間の生に想いを巡らせる端緒となるであろう。

そもそもパンドラ＜パン＝すべてを＋ドラ＝贈られた者＞という女性は、プロメテウスが人間を想ってゼウスに挑戦するものの敗北したために、罰として人間たちに贈られた厄災・悪である。彼女は、神と人間との懸隔を越え出ようとする「傲慢さ（ヒュブリス)」に対する強烈な、そして可視的な科料である。人間は本来的な「分（モイラ)」を甘受することしか許されない存在である。犬の心と不実の性を持つパンドラが甕＜オリジナルは箱ではなくて甕である＞を開けてすべての禍を撒き散らすことは、ゼウスにとっては自明である。問題は、甕の中に残ったとされる「希望」をどのように解釈するかに存する。

ひとつは、それが「甕に残った」以上、甕の外で生きる人間には希望など与えられていないとする解釈である。これは希望の存在を全否定するものであるがゆえに、人間の悲惨さが増幅されることになるであろう。

もうひとつは、甕自体を人間とみなすことで、人間の内部にのみ希望は存するとする解釈である。神にも獣にも希望は必要ないものである。希望を「人間の隠されたモイラ」と捉えることで、生きるという営為での希望の意味を説くことができるであろう。

これら二つの解釈のうちでいずれをとるかによって、パンドラ神話の基本的解釈が相違するであろう。しかし、ヘシオドス自身はその決定をわれわれに委ねながら、彼の人間観や労働観を淡々と語るに留まる。彼によれば、パンドラが持ち込んだ不幸は多くとも、それでも人間は苦しい勤労を通して幸福を発見できるのであり、それは神によっても嘉されうる。またパン

ドラに代表される女性を妻とすることで、男性は悲惨さを分かつパートナーを得たわけであり、ともにモイラ内での生の完遂と充実を図ることこそが、人間的幸福に他ならないとヘシオドスは語るのである。

第8話　なぜ人を殺してはいけないのか、なぜクジラは殺してもいいのか

栫　沢　貴　司（人間学研究室）

「人を殺してはいけないけれども、動物は殺してもいい」――これはわれわれの社会の常識である。しかしこの常識はそれほど根拠確かなものなのだろうか。

「人を殺してはいけない」ということの理由は何であろうか。実はこの問いに答えるのは、それほど簡単なことではない。何らかの理由を提示したとしても、その理由に対して更にまた「なぜ」と問うことができるし、そうすれば、結局は、確実な根拠など存在しえないことが明らかになるのである。しかしそうは言っても、「人を殺してはいけない」という道徳規則を多くの人は常日頃守っている。実際には殺さないでいる。それはなぜなのであろうか。少なくとも、二つの理由があると思われる。一つには、人間は他者の苦しみに無関心ではいられない、ということである。「殺す」ということは他者に痛みをもたらす行為であるが、その痛みは、それに直面した人間――殺人者――にも伝播していく。殺人者もまた痛みを共有せざるをえない。これは殺人者にとっても、もちろん望ましくないことなのである。もう一つの理由は、殺人は自らのアイデンティティを破壊する恐れがある、ということである。道徳は人間のアイデンティティを構成する重要な要素であり、それを破るということ、しかも「殺人」という「取り返しのつかない罪」を犯すことは、アイデンティティの「取り返しのつかない破壊」を招きうるのである。これは、「殺さない理由」の一つなのである。

さてこのような「殺さない理由」、それは、はたして対人間にしか当てはまらないことなのだろうか。私は決してそうではないと考える。それはまた同時に、対動物に関しても妥当しうるものである。そうであるにもかかわらず、人間と動物の扱いに根本的な差異を設けるとするならば、それはまったく一貫性を欠いたことなのである。

第三部　心と体の健康

第9話　健康＆運動

――運動はなぜ必要か――

江　橋　　博（健康科学研究室）

疾病の発症要因には遺伝的要因、外部環境による要因、そして生活習慣による要因がある。我が国における癌、心臓疾患、脳血管障害の3大死因は「生活習慣病」といわれる疾患で、すべて生活習慣（運動、食生活、喫煙、飲酒、休養）に起因している。

生活習慣病といわれる疾患は、この他に糖尿病、肥満症、高脂血症、高血圧症などたくさんある。これらの疾患は別名「運動不足病」ともいわれ、運動が発症に大きく影響していることが多くの研究で明らかにされている。したがって、生活習慣病の予防や改善には運動習慣は欠かすことのできない重要なポイントである。そこで、本講座では運動不足の恐ろしさを解説し、具体的な運動処方の作成法についてアドバイスした。

運動不足の状態が長く続くと、脳（ボケやすくなる）、骨（もろくなり骨折し易くなる）、心臓（狭心症や心筋梗塞になり易くなる）、血管（詰まりやすくなって動脈硬化になりやすくなる）、筋肉（やせ細り、力が出なくなる）などが生じやすくなる。

運動不足を解消するためには、有酸素運動と